

厚木市で発見されたイヌタヌキモとイトモについて

吉田 文雄・高橋 秀男

Fumio YOSHIDA & Hideo TAKAHASHI: Notes on
Utricularia tenuicaulis MIKI (Lentibulariaceae) &
Potamogeton berchtoldii FIEBER (Potamogetonaceae)
found from Atsugi City

過去の神奈川県植物誌を見ると、トチカガミ科、オモダカ科、イバラモ科、タヌキモ科などに含まれる水生植物相は豊かで、多数の種類が記録されている。しかし、神奈川県植物誌調査会が1979~1988年に行った調査では、生育環境の減少にともなって水生植物の種類は少なく、筆者らは神奈川県植物誌(1988)発刊後も水生植物に重点をおいて調査を実施してきた。

今回、厚木市の博物館建設の準備のために、荻野の谷戸の植物相について委託調査を進めていたところ、調査地域内の通称弁天山池で、タヌキモ科のイヌタヌキモ *Utricularia tenuicaulis* MIKI とヒルムシロ科のイトモ *Potamogeton berchtoldii* FIEBER を発見した。本県ではイヌタヌキモは初めての記録であり、この2種について観察した結果を報告する。

本稿は厚木市教育委員会発行の「厚木市荻野の貴重な植物」(1993)より引用させて頂いた。調査に当たっては、厚木市社会教育課博物館準備係および丹沢植物調査団の皆さんに多大なご協力を頂いた。報告をまとめるに当たり、日本歯科大学教授 小宮定志先生には標本閲覧についてご便宜を頂くとともに、文献についてもご教示を頂いた。また神奈川県立博物館の勝山輝男主任学芸員、荻部治紀学芸員、神奈川県立自然保護センター川村優子副技幹より資料の提供を受けた。ここに記し、深甚なる謝意を表するものである。

1. イヌタヌキモ

神奈川県の中央部にある厚木市中荻野にある通称弁天山池は、20数年前に掘削されていたものが放置され、湧水と雨水が溜って出来たものだといわれている。湧水は山の崖の近くから出ていて夏場でも冷たい。周囲にはアカマツ、ミズキ、オノエナギ等があり、池の中にはコガマ、ヒメガマ、ヨシ等が群生している。この池の中に生育していたもので、はじめはタヌキモと同定していたが、その後に培養し、観察していたとこ

ろイヌタヌキモ *Utricularia tenuicaulis* MIKI であることが明らかになった。神奈川県植物誌1988によるとタヌキモは、箱根仙石原他2ヶ所の生育地が確認されているが、イヌタヌキモの分布については記録がない。

イヌタヌキモ *Utricularia tenuicaulis* MIKI は三木(1935)によって、1934年8月に京都市小倉池と宝ヶ池で採集された標本に基づき新種として記載したものである。食虫植物の研究者である小宮(1972)は、三木の記載したイヌタヌキモはタヌキモの単なる一型であるとして、品種のランク *Utricularia vulgaris* L. forma *tenuicaulis* (MIKI) KOMIYA に位置づけた。後に小宮(1980)は学名の先取権からタヌキモの学名をオーストラリア種の *Utricularia australis* R.Br. の品種に組み替えた。筆者らは三木(1935)が独立の分類群とみなした見解に従い、学名は *Utricularia tenuicaulis* MIKI を採用した。分布は本州、四国、九州、沖縄に知られているが、タヌキモよりははるかに生育地は少ない。

弁天山池は7月頃は水量も多く、池に至る道の近くはススキが生い茂り群生していたが、造成のため本年8月にはススキは刈り取られ、池の水抜きがされたこと等により個体数は著しく減少してきている。冬は越冬芽で過すのでほとんど見られない。

イヌタヌキモ *Utricularia tenuicaulis* MIKI はタヌキモによく似た種類であるが、次の様な点により区別されている。花軸は、タヌキモの場合は主軸よりも細いが、イヌタヌキモの場合は主軸よりも太い。越冬芽(殖芽)は、タヌキモでは主軸の先端に生じ、ほぼ球形、暗緑色であるが、イヌタヌキモでは主軸の先端または水中葉の腋の枝軸の先端に生じ、楕円体、褐色であること等の特徴で区別される。またイヌタヌキモはタヌキモに比べ、全体が繊細である。培養してい

るもので越冬芽を測定したところ、タヌキモの越冬芽では径5~10mmで大きく、イヌタヌキモでは小さく、径3~5mmであった。今回調査したイヌタヌキモは、夏から秋にかけての開花を見ることができなかった。花軸の比較検討はできなかった。比較観察に用いたタヌキモ(写真3)は相模湖町産であるが、小宮先生が現在研究中の北米及び東アジアに分布する *U. macrorhiza* LE CONTEではないかのご教示を頂いたので付記しておく。

2. イトモ

イトモ *Potamogeton berchtoldii* FIEBER は神奈川県植物目録(1933)、神奈川県植物誌(1958)を見ると県内各地に普通にあるように記され、箱根植物目録(1958)には自生地として仙石原をあげているが、神奈川県植物誌(1988)の刊行時点では標本は得られなかった。その後、勝山(1990)は仙石原で果実をつけた標本を採集し、箱根には未だ健在であることが明らかした。今回、厚木荻野の弁天山池にタヌキモに混じって少数の個体が確認できた。この池の個体はすべてが果実をつけていた。現在の神奈川県における第二の産地として報告する。

文 献

厚木市教育委員会, 1993. 厚木市荻野の貴重な植物.
勝山輝男, 1990. 植物誌刊行後に記録された植物(3).
FLORA KANAGAWA, (28): 271-273.
神奈川県植物誌調査会編, 1988. 神奈川県植物誌19
88. 1442 pp. 神奈川県立博物館, 横浜.

神奈川県博物館協会, 1958. 神奈川県植物誌. 3+257
pp., 8 pls. 有隣堂, 横浜.

神奈川県博物館調査会編, 1933. 神奈川県植物目録. 5
+111+23 pp. 10 pls. 横浜.

KOMIYA, S., 1972. Systematic studies on the
Lentibulariaceae. *Bull. Nippon Dent.
Univ., Gen. Edu.*, (1): 89p.

KOMIYA, S. and C. SHIBATA, 1980. Distributio
nof the Lentibulariaceae in Japan.
Bull. Nippon Dent. Univ., Gen. Edu.,
(9): 201-211.

小宮定志, 1980. 日本産タヌキモ科植物の学名につい
て. 食虫植物研究会会誌, (91): 10-17

松浦茂寿, 1958. 箱根植物目録. 4+1+2+7+90+2
+25 pp. 3 pls. 箱根博物館, 小田原.

MIKI S., 1935. New Water Plants in Asia
Orientalis III, Bot. Mag. Tokyo, 49 :
847-852.

三木 茂, 1937. 山城水草誌. 京都府史蹟名勝天然記
念物調査報告書, (17): 105-113.

宮代周輔, 1958. 神奈川県植物目録. 3+112+41 pp.,
3pls.

田村道夫, 1981. タヌキモ科 Lentibulariaceae.
佐竹義輔他編, 日本の野生植物 草本編, pp.
137-139. 平凡社, 東京.

(吉田文雄: 清川村立宮ヶ瀬中学校, 高橋秀男: 神奈
川県立博物館)

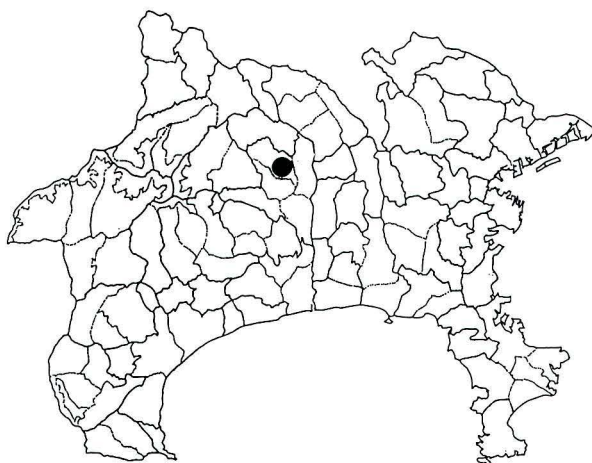


図1. イヌタヌキモの発見された地点を「神奈川県植物誌1988」のメッシュ図で示す。



写真1. イヌタヌキモの生育地，厚木市荻野の通称弁天山池



図2. イヌタヌキモの枝軸の越冬芽 (ca×16)

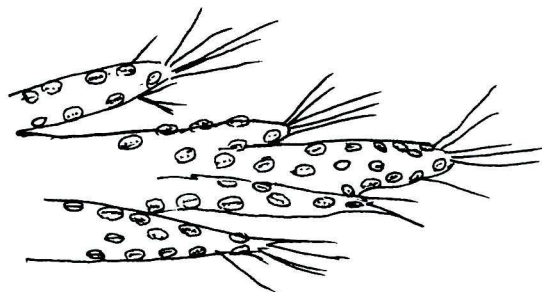


図3. イヌタヌキモの越冬芽の一部 (ca×20)



写真2. 枝軸の先端についたイヌタヌキモの越冬芽
(a, $\times 1$. b, $\times 2$. 厚木市産の培養品を1993年12月に撮影)

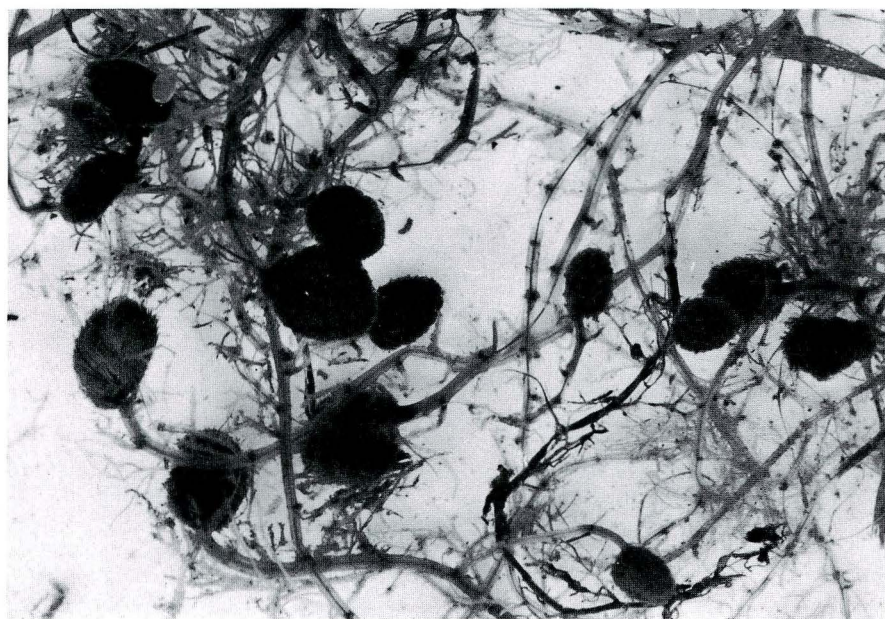


写真3. 主軸の先端についたタヌキモの越冬芽
($\times 1.5$, 相模湖町の採集品を横浜で培養, 1994年1月4日に撮影)